

平成 26 年度

**B 日程 入学試験**

**国 語**

**注 意**

1. 試験開始の合図があるまで，この冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は 45 分です。
3. 問題は，1 ページから 14 ページまで印刷してあります。試験が始まったら最初に確認し，足りないページがあったら申し出なさい。
4. 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
5. 解答用紙には，受験番号・氏名を記入しなさい。
6. 試験が終わった後，問題冊子・解答用紙とも回収します。

① 次の1～8の――線をつけたカタカナを漢字で、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- 1 妹には音楽家としてタイセイしてほしい。
- 2 ドキョウがあることを行動で示す。
- 3 イサイについては後ほどお知らせします。
- 4 年寄りの知恵をハイシヤクする。
- 5 フカカイな行動をとる人がいる。
- 6 市政において画一的な考え方を打ち破る。
- 7 外国との交易が盛んだった。
- 8 無様な姿を子どもには見せたくない。

② 次の1～4の会話表現は、父親の上役・父親・わたしの三人で食事に行った時に（ ）の人が言ったことです。

① ～ ④ にあてはまる正しい会話表現をア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で書きなさい。

1 (店員) どうぞこちらのお席に ①

(わたし) 失礼します。

ア いたしましょう。

イ すわられてよろしいです。

ウ すわらせていただきます。

エ おすわりになってください。

オ なります。

2 (上役がわたしに向かつて) 君が通路側の席でいいかい？

(わたし) ②

ア はい、だいじょうぶ。

イ はい、よろしいです。

ウ はい、かまいません。

エ いいえ、けっこうです。

オ いいえ、かしこまります。

3 (料理を持ってきた店員) それではごゆっくり

③

ア おめしあがりくださいませ。

イ いただいてくださいませ。

ウ お食べくださいませ。

エ おめしになっていただきます。

オ お食べいただきます。

4 (上役がわたしに向かつて) 以前、君のお父さんといっしょに仕事をしてね。

(わたし) はい、 ④

ア お父様がそうおっしゃってありました。

イ お父様もそのように申してありました。

ウ お父さんはそのことを存じております。

エ 父もそのことをお聞きになっております。

オ 父からもそのように聞いております。

3 次 の 詩 を 読 み、下 の 問 い に 答 え な さ い。

生きよう

ことう やすゆき

かたちあるものは  
やがてすべて朽ち果ててしまう

もともとそこにあつたものも

やつとの想いで手に入れたものも

どんなに大切な宝物も

① 私たちの体でさえも

② 宇宙の歴史から見たら

星の瞬きのよう な 私たちの時間

まだ目も開かない子犬たちが

必死にはいつくばりながら

おかあさんのおっぱいにむさぼりつくように

海を渡る鳥たちが

羽を軋ませながらも

ひたすらに羽ばたきを続けるように

今したいこと

今すべきことにいのちを使うこと

1 — 線①「私たちの体でさえも」とありますが、「体でさえも」どうなるといつて

いますか。詩の中から十字以内で探し、初めの三字を書きぬきなさい。

2 — 線②「星の瞬き」とありますが、これはどのような様子を表していますか。

次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア はなやかで美しい様子

イ あつという間の様子

ウ きらきらと輝く様子

エ さびしげな様子

オ 遠くはるかな様子

3 — 線③「むき出しの想い」とありますが、これが表れている行動としてふさわし

くないものを次の中からすべて選び、記号で書きなさい。

ア 子犬がおかあさんのおっぱいにむさぼりつくこと

イ 鳥が羽を軋ませて海を渡っていくこと

ウ 人の思わくを気にしてえんりよすること

エ 他の人にばかにされないようにせいっぱいいばること

オ 生きていく上でうまれる感情を大切にすること

それが 生きるということ

生きよう

まわりを見渡<sup>みわた</sup>して迷っている場合じゃない

感傷にひたっている場合じゃない

たったひとつ

その瞬間<sup>しゅんかん</sup>その瞬間の<sup>③</sup>むき出しの想いだけが  
私たちの生きている証<sup>あかし</sup>

生きよう

④もぎたてのリンゴにかぶりつくように

生きよう

今いる世界のまん中で

せいっぱいに がむしゃらに

生きよう

(『生きよう』海竜社<sup>かいりゅうしゃ</sup>による)

4 — 線④「もぎたてのリンゴにかぶりつく」とありますが、これはどのような様

子を表していますか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 食べたいという気持ちにすなおに従う様子

イ 自然の中で野性的に行動する様子

ウ おいしいものをひたすら食べ続ける様子

エ 栄養を考え健康的に生きようとする様子

オ したいことだけを気ままにする様子

5 この詩によって伝えようとしていることとして、ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア どうせ終わってしまういのちなのだから、好きなことだけをして生きよう。

イ 私たちのほかないいのちを大切にし、少しでも長く生きよう。

ウ 感傷にひたったり迷ったりすることは、時間のむだなのでやめよう。

エ 生き物のいのちを大切にし、人間も動物の一員として生きよう。

オ 限られた時間の中で、できるだけ自分のいのちに忠実に生きよう。

④ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

三店目の「ヴィヴァロワ」で働き出した時から、多くの理想はもう少し具体的になったのです。「<sup>①</sup>権威のある料理人になるよりも、透明人間<sup>しゆめいじんげん</sup>みたいになりたい」と思うようになりました。

この理想のモデルになったのが、このお店のオーナーのクロード・ペイローさんです。

レストランには、ワイン会社の営業の人やチョコレート屋さんがよく来るものです。だけれども、その人たちの目にオーナーの姿は見えない。あまりに従業員然としてゐるから、わからない。みなさん、洗いの場のおじさんのように見えるオーナーに向かって「オーナーはどこにいますか？」と訊いていました。訊かれたオーナーは、洗いの場のおじさん呼びにいたりする。

〔注1〕三つ星を維持して引退しましたが、すばらしい人でした。お店の中には、彼の〔注2〕スピリットが満ちていた。

ぼくは、ペイローさんを日本で体験したいと思いました。自分でやれる大きさ以上の仕事には手を出さない……これは簡単そうで難しい。いつもうれしそうに、楽しそうに仕事をしていました。〔注3〕姑息<sup>こそく</sup>さもない。表も裏もまったく変わりが無い。

ああいう風になりたい。

本質以外は何だかわからない人。だけど、いつも垂れ流しで自分を出している人。

ピュアの純度が高すぎて、あまり理解<sup>せりかい</sup>されていない。世俗<sup>せぞくてき</sup>的なところがなく、レストランを通して社会奉仕<sup>しゃかいほうし</sup>をやっているようでした。

午後の仕込み<sup>しこみ</sup>に必要な食材を、率先<sup>そつせん</sup>して自分で買ってきて「これ買ってきたけど、これでいい？」と訊くんですよ。働いてゐるぼくが「ありがとうございます」と言うのと、

「ありがとうございます、わたしのために働いてくれているのだから、ありがとうございますわたしだ」

彼の立ち居振る舞い<sup>たちゐふるまい</sup>を見ると、<sup>②</sup>世界は広いなあと思われました。ほんとうに尊敬しています。

お客さんがすごく喜んで「今日の料理はすばらしかった」と言う。そうすると彼は〔注4〕厨房<sup>ちゆうぼう</sup>にお客さんをいきなり連れてくるんです。

「すばらしいのはわたしじゃない。彼が作ったんですよ、この子」

オーナー本人がやっていることと言えば、一日じゅう掃除<sup>そうじ</sup>をしている……ほとんど掃除しかしていない。彼の印象に残る姿と  
言えば、「掃除をしている姿」です。

レストランで何よりも重要なのは「清潔度」だということや、お客さんに対する家庭的な態度……ぼくは大切なことの大半を彼から教わったような気がします。仕事場のありようや空気は、そっくりそのまま仕事に映し出されると知りました。

大切なのは、簡潔であり、清潔であり、<sup>③</sup>人間性があるということです。

「整理整頓<sup>せいりせいとん</sup>がなされていることは、仕事がきちんとなされるための基本なのだ」ということが、このお店に来てよくわかった。乱雑な厨房からは、乱雑な料理しか生まれません。大声でわめきたてる厨房からは、端正<sup>たんせい</sup>な料理は生まれません。

最初は掃除の回数が多いことに驚<sup>おどろ</sup>きました。仕事が一段落したら、いつも掃除をしているのです。

「誰<sup>だれ</sup>かが作業中だからその人は抜<sup>ぬ</sup>かす」ということはありません。必ず全員で掃除をする。

ほうきで掃<sup>は</sup>き出すことも、掃除機で吸<sup>す</sup>い込むこともない。

床<sup>ゆか</sup>の汚れもどこの汚れも、いつもぞうきんで拭<sup>ふ</sup>き取<sup>と</sup>っていました。一〇枚ぐらいのぞうきんを常に洗ってゆすいで汚れているところに投げ入れる人がいる。そして各<sup>注5</sup>セクションの持ち場にいる人たちですべての汚れを拭き取るのです。これを全員でやっているのです。落ちているものをなくすまで、掃除は続きます。

朝に掃除をします。昼のための仕込みが終わって一一時頃<sup>注6</sup>に<sup>まかな</sup>賄いのごはんを食べます。食べ終わったら掃除。そして昼のサービスが終わるとまた掃除をする。六時からサービスがはじまりますから、五時に賄いの食事を食べる。食べ終わったらまた掃除。そして夜のサービスが終わる一〇時か一一時にまた掃除をする。

つまり、一日五回の掃除です。

それ以外にも、日頃<sup>ひごろ</sup>できない細かな掃除が並行しているのです。仕込みをしているか、掃除をしているか、というぐらいだった。掃除に関しては小さな思い出があるのです。

すばらしいレストランですが、ぼくは最初はとても緊張<sup>きんちやう</sup>して毎日を過<sup>すご</sup>していました。それまでの田園生活から一変して、パリの三つ星レストランに来たわけですから。

「こんなすごいお店で、ぼくはやっていけるのだろうか？」

最初は、都会<sup>かみ</sup>の環境<sup>かんぎやう</sup>とお店の<sup>注7</sup>グレードに呑<sup>の</sup>まれないうちに、ぼくなりに必死でした。チームメイトとの水準<sup>すいじゆん</sup>の違い<sup>ちがひ</sup>に、場違いではないかという<sup>注8</sup>疎外<sup>そがい</sup>感を覚えていたし、精神的にも三つ星のプレッシャーを受けていた。少し混乱<sup>こんらん</sup>していたかもしれせん。

パリに来て間がなかったある週末、自分の部屋の掃除機の中に毛玉が<sup>はい</sup>入り込んでいて、動かなくなっていました。

前の人の使っているものを譲<sup>ゆず</sup>り受けていたから、だいたい古い掃除機です。使えるようにするために、掃除機を開けて毛玉を掃除することにしました。午後の陽<sup>ひ</sup>だまりの中、新聞紙を下に敷<sup>し</sup>いてその上にあぐらをかき、ひざの上にそれを広げて作業をはじめたのです。

そうしたら、理由はよくわからなかったけれど、掃除機の毛玉をきれいにしている途中に、<sup>④</sup>とても心が満たされた。やっていることは煩<sup>はん</sup>雑な操作です。毛玉をひとつずつほぐして除去していく、面倒<sup>めんどう</sup>なだけの作業だった。でも……。

「この掃除機は、<sup>⑤</sup>今の自分のような状態なのではないか？」

やりはじめると、そんなように思えて心がやすらいだのです。パリに出てきてグチャグチャになっている自分の姿に見えた。

「巻<sup>ま</sup>き込まれている毛玉だのゴミだのは、こんがらがって混乱したばかり自身の感情なんだ」

クシを使ってゴミを掻<sup>か</sup>き出すというバカみたいなことなんですよ。端<sup>はた</sup>から見たら、休みの日にムダな作業をしているだけの姿でしょう。でも、このゴミの除去は、とても大切なことに思えたのです。

少しずつだけど、ひとつずつしか進まないけれど、自分でやらなかったら何も変わらない。

目の前にある課題は、自分で丁寧<sup>ていねい</sup>に解きほぐすしかない。ひとつずつ解きほぐせば、必ずうまくいくはずだ。不安を抱<sup>かか</sup>えながら混乱していた時期だったから、問題が解決するということ自体が、ありがたかったですね。

パリでの生活に吞まれて、もしかしたら最初のボタンを掛け違<sup>ちが</sup>えてしまうかもしれない時期だった。だからこそ、あの週末に掃除機の毛玉に出会えたことは、とても幸運だったような気がします。そのあとのフランスの生活が、がぜん楽しくなったのです。意思疎<sup>いしそつ</sup>通<sup>つう</sup>すること以上に大切なことは、そんなにない。

自分の評価や直接に得になることだけを求める姿勢ではないかと思いはじめた時期です。ここでは自分の労力はソンになったかもしれない。でも、こちらで得たことをふまえると、<sup>(注9)</sup>相殺<sup>そうさつ</sup>すればちよつとだけよくなったと思えばいいじゃないか。

評価を追わず、そうやって少しずつ階段を上がることができるようになった。まわりに自分がプレゼントできるものを与<sup>あた</sup>えてからが仕事なんだ。欲しいものだけを追っていても、結果として欲しいものは手に入らない……。

今のお店でも、ぼくは掃除を第一にしていますね。掃除ができない人は、何もできないと思います。



掃除や雑用について、視点を変えて見てみると、人が手を染めたがらない作業の中に、多くのヒントがありますね。ほくにとつては、掃除や雑用を通じて感じ、考え、整理された多くの体験が、あとで料理人として自立する上で大きな原動力になっていきました。

⑥

掃除と雑用を通してほくが実感したのは、そんな古い諺ことわざでした。

例えば、調理場で働き出した人は、ほとんどの人が洗い場からのスタートになるでしょう。

そこでどのような手順で、鍋や皿や多くの食材、フキン、調理器具などを洗うか。

これはお湯をかけたあと、スポンジや金ダワシに洗剤せんざいを加える時に、汚れをちょうどきれいに落とせるぐらいの、最小限の洗剤濃度で洗うべきなのです。壁や床を掃除すること、基本的には同じ方針であるべきでしょう。

洗剤が強いと一瞬いつしゅんできれいになるというイメージがありますが、反面、ゆすぎに多くの水と時間を必要とします。必要以上の行為が、時として膨大な無駄むだを生むこともあるのです。

料理や対人関係にしても、尽くしすぎるのがいいかと言うと、そうではないですよ。強すぎると、飽きあが来てしまう。必要最小限のシンプルなすばらしさ……そのバランスにたどりつくまでに、なんともスマートならざる試行錯誤しこうさくごを重ねていくというわけです。

ソースひとつ取っても、情感に訴えかけるちょうどいい塩梅あんばいの香料や酸味、塩味、バターなどの加減があるはず。

そういったバランス感覚は、掃除や雑用からも、十分に学び取ることができると思います。雑用全般ぜんぱんを、高水準でなんなくこなせるようになったならば、その人の技術は、すでに料理長の領域にあると思うのです。<sup>⑦</sup>他の職業でも、同じことが言えるのではないのでしょうか。

(斉須政雄『調理場という戦場』朝日出版社 による)

注1 三つ星 Ⅱ レストランで最高位の評価を表す

注2 スピリット Ⅱ 考え方、しぜい姿勢

注3 姑息さ Ⅱ その場しのぎの様子

注4 厨房 Ⅱ 調理場

注5 セクシヨン Ⅱ 仕事の担当

注6 賄いのごはん Ⅱ 料理人が、自分たちが食べるために作る料理

注7 グレード Ⅱ 等級

注8 疎外感 Ⅱ 仲間はずれになっているという感じ

注9 相殺 Ⅱ 差し引きして損得なしにすること

1 ———線①「透明人間」とありますが、どういう人ですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア いつもうれしそうに自分の仕事をしている人

イ 他の人に自分の良さをいつも強調している人

ウ まわりのだれからも愛され親しまれている人

エ いつもそばにいて仲間をばげましてくる人

オ まわりにとけこんでそのすばらしさがわかりにくい人

2 ———線②「世界は広いなあ」とありますが、どういう意味ですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 日本には決していないようなタイプの人がいるということ

イ レストランの世界だけに多く見られるタイプの人がいるということ

ウ 世界各国で同じタイプの人をよく見かけるということ

エ 今までに見たことがないようなタイプの人がいるということ

オ 日本から遠くはなれた国でしか会えないような人がいるということ

3 —線③「人間性がある」とありますが、それが具体的に表れているものを次の中から二つ選び、記号で書きなさい。

ア お客に対して家庭的な態度で対応できること

イ 一人でも非常に優秀な料理人などがいること

ウ お店の人たちとうまく心を通わせて仕事をする事

エ お店の他の人たちときそつて一流の料理人を目指すこと

オ お店のすべてのことを一人でできるオーナーがいること

4 —線④「とても心が満たされた」とありますが、どういう意味ですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 掃除機のめんどろな修理がうまくできたことで、料理人としても自信になった。

イ こみいつて見える問題も一つ一つ単純なものにすれば、自分で解決できるとわかつた。

ウ 毛玉をきれいにするようなムダに見える仕事でも大切なことであると気づいた。

エ 週末の午後の陽だまりの中で掃除機の修理ができたので、非常に気分が良くなつた。

オ 前の人の使つていたものを譲り受けたので、その人に対して非常に感謝した。

5 —線⑤「今の自分のような状態」とありますが、当時の筆者の状態を表している二字の熟語を文章中から二つ探し、それぞれ書きぬきなさい。

6 —⑥にあてはまることばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 石の上にも三年

イ 海千山千

ウ 可愛い子には旅をさせよ

エ 過ぎたるは、及ばざるがごとし

オ 棚からぼたもち

7 —線⑦「他の職業でも、同じことが言える」とありますが、どのようなことがいえるのですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 人のいやがる掃除などの仕事がうまくできること

イ 人の上に立つような高い技術を持つてゐること

ウ 雑用などから仕事のバランス感覚を理解すること

エ いろいろな人との対人関係をうまくできること

オ 仕事で使う道具を大切にあつかうこと

⑤ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

ま、それはともかく、このように日本人にとって自然は昔からそこにあるのが当たり前であり、改めてその価値を考えることもなく代々生きてきたということなんですよ。

ことのついでに「水の話」もしておきましょうかな。稲作には水を使いますが、どれくらい使うかという計算はこのようになります。

一反歩<sup>たんぶ</sup>、一〇アールの田んぼは一〇〇〇平方メートルですから一センチの水をためると一〇トン、三センチで三〇トンですね。そのままにしておくとも水は減ります。これを「減水深」といいます。内訳は地下水に五パーセント、水路に流出二五パーセント、蒸発一四パーセント、稲が吸収するのが七パーセントです。水が減った分は供給します。一日の減水深が二センチだとすれば毎日二〇トンの水を入れているわけですね。田植えから収穫<sup>しゆかく</sup>まで約四か月ですから、二〇トンの二二〇日で二四〇〇トン。<sup>①</sup>全国平均は二七〇〇トンです。

日本人の生活用水の使用量は一人年間一二〇トンですから稲の吸収分だけでいえば、約<sup>②</sup>人分で一反歩のコメ約五〇〇キロがとれ、年間消費量六三キロで八人分の主食をまかなう、と、まあ、こういう勘定<sup>かんじょう</sup>になるわけですよ。

平成十五年の春、熊本<sup>くまもと</sup>市で開かれた「日本水環境学会」の<sup>③</sup>（注<sup>①</sup>）シンポジウムは面白<sup>おもしろ</sup>かったですよ。<sup>④</sup>（注<sup>②</sup>）概略<sup>がいりやく</sup>を報告<sup>ほうこく</sup>しましょう。熊本市とその周辺に住むおよそ九〇万人が使っている水はすべて阿蘇<sup>あそ</sup>山の伏流水<sup>ふくりゅうすい</sup>。つまり地下水なんだそうです。今日地下に浸<sup>し</sup>みこんだ水を明日使うというものではなく、長いものでは数万年、阿蘇<sup>あそ</sup>の場合は比較<sup>ひかく</sup>的短<sup>みじか</sup>くて二〇〇年ぐらいたそうですな。

さて、その<sup>④</sup>阿蘇<sup>あそ</sup>の地下水の供給量が近年急激に減ってきた。降雨量は変わっていないし誰<sup>だれ</sup>かが途中<sup>とちゆう</sup>で汲<sup>く</sup>み上げて<sup>あ</sup>いるわけでもない。

ではなぜか？ なんと阿蘇山周辺の水田<sup>すいでん</sup>の減反<sup>げんたん</sup>が原因<sup>げんいん</sup>だというんですな。なにしろ四割も減反して田んぼに水を張らないわけですから、地下水の供給量が減ったわけです。

天から降ってきた雨は地下に浸みこむか川をへて海へ流出するかですよ。これは田んぼに稲を作ろうと作るまいと関係ない。これまで私はそう考えてきたんですよ。ところが違<sup>ちが</sup>うんですよ、これが。私が感動したのはこのところですよ。

田植えをするためにはまず川をせき止めます。これを「井堰<sup>いせき</sup>」と呼びますが、川の上流から下流までこの堰<sup>せき</sup>をいくつも作って川の水を横に流して田んぼに入れるわけですね。水の使い方は前に述べた通りですが、ここで一つ「減水深」を思い出してください。

さい。阿蘇山周辺の田んぼは火山灰土で水もちが悪く、なんと一日の減水深が一〇センチというんですな。そう、たった一反歩の田んぼから毎日一〇〇トンの水が地下へ供給されていたわけですよ。地元の農家の話では、田んぼの下にもう一つの川があつて、ごうごう音をたてて流れていたというんですな。自然界のなんとも絶妙な(注3) システムじゃないですか。ところがコメの減反とともに地下水の供給が減ってきた。

⑤ シンポジウムの結論は、地下水供給源の水田農業を支援しえんしないかぎり水が(注4) 枯渇こかつして人が住めなくなるでしたな。高いコメを買い支えるか、地下水税を新設してそのカネで田んぼに水だけを張つてもらうしかないということでしたよ。

地下水を利用してない人たちにはピンとこない話かもしれませんが、農業が(注5) 衰退すいたい、あるいは滅びはろることによって、これまで農が無償むしょうで支えてきた日本の自然環境にいろんな変化、影響えんきやうが出てくるんでしような。

「環境」という観点からいえば、⑥ 農産物の貿易ほど愚かなものはありません。(注6) 愚の骨頂ぐですよ。そもそも自分の田んぼを荒あらして、なにゆえに外国のコメを買わなければいけないんですか。自分の畑で作れるものを、はるばる海の向こうから、地球の裏側から船や飛行機で大量の油を消費し環境を汚よごしながら運んでくる理由がどこにあるのでしょうか。そりゃ、ま、国内農産物は多少は高いでしょうが、土地も賃金も資材も高いわけですから当然のことではないですか。

(山下惣一『農から見た日本―ある農民作家の遺書』清流出版 による)

注1 シンポジウム 〓 ある問題について、専門家などが意見を出したあと、会場にいる人の質問に答える形で進められる話し合い

注2 概略 〓 物事のおおよその内容

注3 システム 〓 仕組み

注4 枯渇 〓 かれてなくなる事

注5 衰退 〓 弱まり、おとろえる事

注6 愚の骨頂 〓 この上なくおろかである事

1 — 線①「全国平均は二七〇〇トンです。」とありますが、これは何の全国平均を表していますか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

- ア 一〇〇〇平方メートルの田んぼから水路に流出する水の量
- イ 一〇〇〇平方メートルの田んぼから稲が吸収する水の量
- ウ 一〇アールの田んぼから毎日地下へ供給される水の量
- エ 一アールの田んぼに水を張った時の一日あたりの減水深の量
- オ 一反歩の田んぼのために一年間に供給する水の総量

2 ② にあてはまる数字として、ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

- ア 〇・五
- イ 一
- ウ 四
- エ 八
- オ 一〇

3 — 線③「面白かったですよ」とありますが、何が「面白かった」のですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

- ア 熊本市の地下水供給量が減っている現状がくわしく分かったこと
- イ 阿蘇山の伏流水の流れる仕組みについて学ぶことができたこと
- ウ 環境という観点から見ると、水は私たちの心をいやす存在だとされたこと
- エ 水の供給のために、一見無関係に思われる農業が役立っていたことがわかったこと
- オ 人類にとって水は生きるために必要であると結論づけられたこと

4 — 線④「阿蘇の地下水の供給量が近年急激に減ってきた」とありますが、その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

- ア 二百年前に阿蘇山周辺の降雨量が急激に減ったことの結果が今現れてきているから
- イ 阿蘇の周辺の田んぼは火山灰土で水もちが悪く、他の地域よりも減水深がずっと多いから
- ウ 周辺の水田を四割も減反してしまっただけに、一反歩あたりの田んぼに供給する水の量が少なくなったから
- エ 田んぼに稲を作ろうと作るまいと関係なく、地下に浸みこむ雨水の量は減ってしまったから
- オ 田んぼの減水深による地下への水の供給量が、周辺の水田が少なくなったことで減ってしまったから

5 — 線⑤「シンポジウムの結論」をまとめた次の文の  にあてはまることばを、後からそれぞれ一つずつ選び、記号で書きなさい。

⑤ A は ⑤ B を無償で支えてきたのだ。

ア 山の水      イ 農業      ウ 暮らしの水      エ 地下水税      オ 川の水

6 — 線⑥「農産物の貿易ほど愚かなものはありません」とありますが、その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。  
ア 自国の田畑で農作物を作れば、自然環境を豊かに保ち、水や食料という生命の基本となる資源を得ることができるので、一番よいことだから  
イ 自国の農地で作れるものを外国から買うことは、自国の農地を荒らして自然環境への悪影響が出る上に、農業にかかわる人の仕事がなくなるから  
ウ 地球全体の環境が決定的に悪くなるのは、他国でできた農作物の運送のために大量のガソリンを使用することによるから  
エ 土地も賃金も資材も高い国内産の農産物は、外国産に比べるととても値段が高いため、貧しい人々には買うことができなくなってしまいうから  
オ お金があるからといって外国産の農作物を買いしめると、その分、貧しい国の人々の分け前となる食料が減ることになってしまうから

7 次の文の中から、この文章の内容と合っているものをすべて選び、記号で書きなさい。

ア 日本人は経済発展を最優先にしたため、自然環境を汚した。  
イ 田んぼの減水深のうち、地下水となる水の割合が一番多い。  
ウ 天から降ってきた雨は、水田の多少にかかわらず、人の暮らしを豊かにしてくれる。  
エ 田植えをするためには、「井堰」をつくり川の水を田んぼに導き入れる。  
オ 阿蘇山周辺の田んぼの下にはもう一つの川があり、メダカやヤゴが住んでいる。

(問題はこれで終わりです)